

教材研究・伊藤 整「青春について」

——手品の種明かし——

1 基本的姿勢

この論文にはいたって地味で平凡な標題と、多少は人目を惹く副題とが付けられている。おそらく、この論文に目をとめてくださった方は副題につられてのことだと思われるので、まず副題の意味について簡単に説明することから始めたい。

私は、いわゆるレトリックと呼ばれるものをすべて一種の「手品」であるとみなす。そしてその手品の種明かしをすること、すなわちある話し手、書き手のレトリックを解剖し、それが人を説得する秘密を別括して指し示す作業をもって修辭学的分析 (rhetorical analysis) と呼ぶ(1)。これは定義としては比喩的で厳密ではないが、具体的な分析の方略 (strategy) や方法 (method) はその分析の対象とするものによって大きく変わるものであるから、ここではこのような基本的姿勢を示すのみとする。

ところで、手品という言葉を使う以上、そこには当然のように「だます」「誑かす」「幻惑させる」といった否定的な含みが伴ってしまうが、それは計算の上のことである。はなはだ穏やかでない物言いをすれば、私は、単純な詭弁や虚偽は論外として、レトリックというものはみな本質的にそのような「際どい」性質を持っている

香 西 秀 信

と思っている。それはどういふことか、最もレトリックらしいレトリックである「譬え」による議論によって説明してみよう。次の文章を見ていただきたい。

金田一氏は日本の名文家と考へられてゐる紫式部、近松、西鶴、芭蕉、朱舜水にも、語法、文字の誤り、拙劣、或いは新語、外来語の濫用があることを指摘し、それを楯に現代の日本語は乱れてゐないと診断してゐます。これは乱暴な話で、その論法を以てすれば、山登りの専門家でもクレバスに落ちて死ぬことがあるのだから、高校生の滅茶を咎め立てする事はないと言ふことになる。しかし、芭蕉が自動詞と他動詞を混用したからと言つて、今の子供がさうしてゐるのを見聞きしても吾々は黙認しなければいけないのでせうか。

福田恆存「世俗化に抗す」(2)

この議論を多少整理して示すと、まず金田一氏は、「名文家と考へられている人達の文章にも様々な『乱れ』が見られること」をもつて、「現代人の日本語の『乱れ』に目くじらを立てる必要はない」と主張する。これに対して福田氏は、それは「山登りの専門家でも

クレバスに落ちて死ぬことがあること」から「高校生の無謀な登山を咎め立てることはない」というのと同じであると批判する。が、厳密にいえばこれは「同じ」ではない。金田一氏の主張に見られる判断と、福田氏の「譬え」を構成する判断とは等価ではなく、後者は前者の判断に含まれる「関係」を誇張しているのである(3)。(だからこそ「譬え」による議論は、議論法としての効力を持つのであるといえる。)このように、「譬え」による議論は、等価でない判断を「同じ」ものであるかのごとく読み手に思わせることによって成り立っているのである。私がいうレトリックの「際どさ」とはこのようなものである。

念の為にいつておけば、私は決して福田氏の議論が間違っているとか、詭弁であるとかいつているのではない。むしろ、その主張も論法も「正しい」と思っている。ただ、その「正しい」ということは、厳密で客観的なものではない。レトリックとは本来客観的な実証や科学的な証明が成り立たない領域で機能するものである。そのような領域での問題について、語り手が自身の主張を聞き手に受け入れさせたい、あるいは反論を容易に許さないだけの説得力を持たせたいと願うとき、そこに必然的にレトリックが現れる。レトリックとはこのような目的のための言葉の「手練手管」なのだ。そしてその「手練手管」をいかに巧みに実行するかということがレトリックの倫理(the ethics of rhetoric)なのである。だからもし説得といふことに無頓着な著者がいれば、彼は修辭学的にはなほだ「不誠実な」人間なのだといえよう。

誤解を避けるためにさらに付け加える。ここでいうレトリックはいわゆるレトリカルな装いをしていする必要はまったくない。読者を

練ろうとすることなど嫌いだとして、自分はなるべくレトリックを排した中立で客観的な文章を書きたいとある著者が言うとき、彼はまさにそのような姿勢によって自身の文章に説得力を持たせようとしているのである。(「シーザーの『ガリア戦記』はその典型的な例だ。)また、説得という目的を意識として自覚している必要もない。例えば、ある勤労学生が、「青年の主張」において、貧乏と闘いながら勉学を続けることの苦しさについて話すとき、たとえ彼自身の意図が純粹なものであったとしても、そこには題材の選択においてレトリックが働いているとみなす。聴衆と審査員のいる前で、しかもコンクール型式で競われることを承知して、理論的には無数の選択肢の中からそのような題材を選んだのであるから、彼はその選択に責任を持たなくてはならない。語り手が説得を意識するしなにかかわらず、言葉というものは本質的に「説得的」なものである。リチャード・ウィバー(Richard M. Weaver)は、言葉を喋る人はみな「説教師」(preacher)であり、言葉は「説教的」(sermonic)なものであると述べている。「われわれが言葉を発するやいなや、われわれは聞き手に世界を、或いはその一部を、われわれと同じように見るようにしむけているのである(4)。」

このように、レトリックというものは、語り手(書き手)が説得を意識しない場合にも現れるものであるが、修辭学的分析という方法にとつては、やはり論説・評論のように意図的に説得を狙った文種を対象にしたほうがより多くの成果が期待できることはいまでもない。その意味で、ここでとりあげる伊藤整の「青春について」という教材は、修辭学的分析を適用するには最適のものであるといえよう。向井敏氏は、この文章について次のように書いている。

……伊藤整のこの文章のわけでもおそるべきは、論の組み立て方、論理の練り方の巧妙である。

元来、伊藤整は論理の操作、平たくいえば理屈のこね方にかけてはたぐいまれな名手、この人の文学評論の面白さもそのことにかかわるところが大きいのだが、この「青春について」はその方面の才腕を披露して最もめざましい例の一つであろう⁽⁵⁾。

本論文は、表面上は一応教材分析というかたちになっているが、一方ではまた、修辭学的分析という、私にとって多少輪郭の見え始めてきた方法を、この優れてレトリカルな教材に適用することによってより明確なものにしたいという方法的なねらいももっている。つまり、具体的作品をある方法で分析すると同時に、その分析作業を通して、その方法そのものも洗練させていこうとする二重の目的をもったものなのである。なお、この「青春について」という教材は、玉木雅己氏の調査によれば、第一学習社（新国語Ⅱ）、筑摩書房（国語Ⅱ）、学校図書（現代文）、角川書店（現代文）、三省堂（現代文）、尚学図書（新選現代文）の各教科書に採られているが⁽⁶⁾、本論文が拠ったテキストは、角川書店（現代文）の昭和61年度版である。

2 分析

まず、「青春について」の最初の数段落を引用する。

青春の明け方は、ずいぶん早めにやって来るもので、そして、それはなかなか終わりにならない。私の経験で言えば、青春は少年時代にすでにやって来ていた。（私は早熟であった。）そして、だれもがそうであるように、私は自分を早熟だと思って、早く目覚めた自分の青春を、他人の目から隠そうとし、また自分自身の目からさえ隠そうと努力した。そのときに私に意識された青春らしいものは、自分に対する開眼の願いと、異性に対する開眼の願い、そして、その二つの願いを通して、人生が自分の後方でなく、前方に全部未開発で残っている、という気持ちであった。

気難しくて博識なる老人日夏耿之介の詩の一節に、

われ讚美す

たしかなるみずからのもちものについて

われは最初にもっとも不思議なる青春なり

（中略）

われは孤りなり

われは青春く

われは繊細し

されどわれは所有す

所有は五月の曲江のやうに照りかがやき

はつ夏の日輪のやうに撫愛しむ

というのがある。私が初めてこの詩を読んだのは、数え年十七歳の八月だったから、満で言うると十六歳と七か月であった。そして満十六歳半の私は、自分自身の若さというべきものが、この詩の中に見事に捕捉され、ピチピチと生きているのを感じた。私は自分の青春を理解した。私が十六歳で理解したものは、今また十六

歳の少年が理解する、と思わねばならない。

この詩人は、その時、「所有」ということを認識の核としてゐるわけである。青春が所有するもの、それは、全人生である。それはいわば地球を自分は所有していると考えるところと同様であり、人生というものを全部まだ「手つかず」で所有している、というのと同断である。

石垣義昭氏は、「青春を若さや活力や希望といった観念によらず、『所有』という観念によってとらえたところに、伊藤整の独自の切り口がある」と書いているが、この「所有」という言葉は、伊藤整がこの文章の中で華麗に演じてみせた手品を構成する重要な鍵語の一つである。「青春が所有するもの、それは全人生である。」なぜか。青年は人生において、まだ何にも手をつけていないからである。何にも手につけていない、現実には何も所有していないからこそ、何でも所有できる可能性が残されている。スペインの諺に、「一つの扉を開ければ他の扉が閉じる」というのがある。生きるということとは選択することだ。ある道を選べば、たとえそこで成功したとしても、いやそこで成功したがゆえに、他の道に進む可能性を失うのである。われわれにはたった一つの現実の所有が残り、無数の観念としての所有は消えてなくなる。が、青春の始まりにある者は違う。彼らは、何も持っていないがゆえに、また何にも手をつけてないがゆえに、可能性としてすべてを所有しているという逆説が許されているのだ。

が、よほど単純で愚鈍な青年ならともかく、普通程度の頭があれば、自分の前途がそれ程洋々たるものでないということに気づくだ

ろう。家柄、財産、才能、容姿、その他諸々の要素が自分の未来を狭く限定してしまっているのである。自分には無限の可能性どころか極めて限られた選択肢しか残っていない。鋭敏な伊藤整がその事に気づかぬはずはない。

だが、そのような所有とは、全く所有しないことともほとんど同義である。だから、私自身は、日夏先生と違って十六歳の時、自分は何も所有していない、という意識を強く持っていた。「所有」を、物質的な面に限って言っても、私は中学校へ通えるだけの資力を子だくさんの貧弱な勤め人であった私の父なる男から、搾取し、仕立て直しの制服と一そろいの教科書と、通学定期券を持っていた。しかし、その所有は「青春」の所有ではない。青春の所有とみなされるものは、本質的に言うと未開発なる人生の未来である。現象的に言えば、それは自分が持つ可能性のあるところの才能であり、勇気であり、美貌であり、敏感な、そして広い心であり、肉体の力と健康であり、かつたぶんよき友人であり、女性の友であった。それらの「曲江のやうな」輝かしい青春の所有の、ほとんど全部を、私は、自分が持つてもいず、かつ持つ可能性もほとんどないと意識した。

(中略) すなわち私は、健康な肉体の力、美貌、広い心、勇気、才能、女性の友などという、青春の最も輝かしい伴侶とみなされるものを、全く欠いていた。それらのものを所有しない、という意識は、日常痛烈に私を苦しめ、自分を劣れるものと感じさせ、自分が青春を生きていないこと、たぶんしたがって人生らしい人生を生きることができないだろうことを予感させて、私を脅かし

た。そのとき私の感じた脅迫感の荒涼とした非人間的な恐ろしさを、私はいま五十歳になろうとして、まざまざと思い起こすことができる。

そして、私の中にまだ消えないところの、それらを所有したいという青春らしいものは、今も私の耳もとでささやくのである。お前は、結局、お前の青春を所有しなかった。それは、もう再びお前が所有することは決してないであろう、と。私の青春は、衰え、力弱くなりながらも、私の肩の辺りに腰掛けている。

彼は私が喫茶店の片隅でボウゼンとしている時、私が木々の緑なる水のほとりを歩く時、私が年若い学生の群れとすれちがう時、私の耳にささやくのである。オレは今までお前に付きまといつてきたが、ついにそれは無駄であった。お前は、かつて、一度もオレを満足させたことがなかった、と。そうだ、私は彼を満足させることをしなかった。

伊藤整は既に青春の始まりにおいて、「輝かしい青春の所有の、ほとんど全部を、私は、自分が持つてみえず、かつ持つ可能性もほとんどないと意識した」という。そして「持つ可能性もほとんどない」という予想は不幸にも（或いは当然のごとく）的中した。彼が所有したがった「青春らしいもの」は、今彼の耳元でささやくのである。「お前は、結局、お前の青春を所有しなかった。それは、もう再びお前が所有することは決してないであろう」と。

だが、伊藤整はそのようなささやきに負けなかった。彼は現実には所有しなかった青春を論理の力で得ようとする。

しかし、だからと言って、私が青春を知らなかったことにはならない。むしろ私はそれを所有しなかっただけ、それだけ、強烈に青春を知っていたような気がする。私は、青春というものを、青春らしい生活型式や交友や恋愛やスポーツそのものとしては所有しなかった。しかしそれらを所有しないことで、正確に言えば、所有しないと思つた時、青春は私にあった。私は、長い間かかつて、青春らしい生活の形は、大したものではないこと、さらに大胆に言えば、そんなものはツマラヌモノであることを理解した。私の肩の上に座って、私につまらぬことをささやくやつは、それは、私が論理的には捨てたやつが、単に情緒的に、仮にそこに座って、私を失われたものへの情感に誘惑している亡霊にすぎないのである。

(中略) 大学生活、ダンスパーティー、クリームソーダ、クリスマスケーキ、誕生日のプレゼント、湖畔のキャンピング小屋、ビール、チカラソル、酒のグラス、対抗競技、少女との出会い、そのような甘美なイメージを甘美なものとして受け取ることの中にある青春を、私は偽物であると断定する。それらの中に歩み入ってみるがいい。その中にあるものは、弱いものと劣れるものへの卑劣さの白眼視、洋服や小遣い銭や思想や家柄の競争、見えや傲慢さや卑劣さの渦巻きである。そして、そのような甘美なものとの題目の与える虚偽と、その中にあふれている人間らしい醜陋さのリアリズムとを理解するのは、その全種目を行為してみなくても足りるものである。一つの経験は他の同種のものの実現されるであろうところの実体を暴露する。それらの醜さとむなしさに耐える時に、本当の青春の力が必要になる。それらのもに耐える力は、老年

にはまったく存在せず、中年にもほとんど存在しない。青春のみがそれに耐えることができる。

しかし、本当に力が必要なのは、単に耐えることではない。目標を持たずに耐える、ということである。いつ、どのようにして、自分に、あることが満たされ、あることが成就し、このむなしさから抜け出すことができるか、ということが、あらゆる青年のひそかな、そして心からの願いであり、期待である。しかしだれも、何人も、その青年に、それを確約してやることができない。洪水の後に新しい発芽と成長の実りがあるかどうかは、本人にはわからず、まして他人にはわからない。しかも彼は全力でもって、何かをなそうとし、崩壊に耐え、無限にやり直して、待っていないければならない。そして、そのようなものが、いつ終わりになるかわからない。それが青春である。

伊藤整がここで展開した論理は、見かけの平易さに反して複雑なからくりで満ちているので、一つ一つ解きほぐしていきたい。

まず彼は、いわゆる「青春らしい生活の形」は「ツマラヌモノ」であり、「大学生活、ダンスパーティー、クリームソーダ、……」などの「甘美なイメージを甘美なものとして受け取るものの中にある青春」は「偽物」と断定する。一見どうということのない意見のように思われるが、実はこれが手品の一つなのである。この種明かしをするためには、少し回り道をして、説得的定義 (Persuasive definition) と呼ばれる特殊な定義について説明する必要がある。

説得的定義は、アメリカの倫理学者ステイーヴンソン (Charles L. Stevenson) が、一九三八年に『マインド』に寄せた論文の中で

提唱したものである。ステイーヴンソンはそこで、説得的定義について次のように説明している。

「説得的」定義とは、よく知られている語に対して、その情緒的意味をあまり変化させることなしに、新しい概念的意味を与え、それによって、人々の関心の方向を変えることを意識的にあるいは無意識的に目的として用いられるものである⁽⁸⁾。

これは具体例がなければ何のことか分からないので、ステイーヴンソンが著書『倫理と言語』(Ethics and Language, 1944) であげている例を少し短くして引用してみる。

A 話し方からはっきりと分かるように、彼は公式の教育をほとんど受けていない。彼の書く文章は、しばしば不作法であるし、歴史や文学に言及するときには、これ見よがしな感じがする。

思考には、きちんと訓練された知識人に見られる精密さや鋭さが欠けている。彼は全く教養がない。

B いや違う。あなたは教養の上っ面、中身の空っぽな単なる見せかけだけを強調しているのだ。「教養」という言葉の正しくて完全な意味は、「創造力豊かな感受性」や「獨創性」ということだ。彼はそれを持っている。だから、きわめて控えめに言っても、彼は、教育程度においてまさっているわれわれの多くよりはるかに教養があるといえるだろう⁽⁹⁾。

A の人物は「教養」の慣用的な意味から、「彼」は教養がないと言っている。それに対して B は、その「教養」の意味は間違っている

るとして、「教養」の「真の」意味と彼が考えるものをあげ、それに当てはまる「彼」は教養があると主張するのである。ここでBが見せた、ある語の自分の使い方を他人にも受け入れさせようとするような定義の仕方が説得的定義である。

さて、このように見てくると、伊藤整が先の文章で主張した意見も、一種の「青春」の説得的定義であるということができるだけだろう。ただし、ここでどうしても見のがしてはならないことは、伊藤整は「偽の」青春については、「大学生活、ダンスパーティー、クリームソーダ、……」と具体的に数えあげ、裂帛の気合いで糾弾しているが、彼が「真の」青春と考えるものについては、少なくとも具体的ななかたちではまったく示さないまま論理を進行させているということである。この手品については既に谷沢永一氏が的確な指摘をしている。

確かに伊藤整の喝破する通り、「そんなものはツマラヌモノであること」は事実だ。ではその対極に位置して此の人生には、ツマラヌモノではないホンモノが何処かに用意されているのか。そんな結構なモノは絶対に見当たらぬのだ。とすれば同じくツマラヌモノであるなら、「健康な肉体の力、美貌」その他その他を、誰にどう言われようとしつかり「所有」するほうが増しである。少なくとも理論上は飽く迄そうなる。

しかし現実には稀少価値をめぐって回転しているから、そういう幸福な「所有」が誰にも与えられはしない。そのとき発動して気休めにできる衛生薬が、伊藤整の調合によるツマラヌモノの論理である。しかし高が論理ひとつでも組み立て方によっては、これ

程に甚大な効果を發揮し得るのかと、私は驚き呆れて伊藤整の辣腕に敬服した。

(中略) 論理とは何かを省略して始めて成り立つ芸なのだ。伊藤整は「青春の最も輝かしい伴侶と見なされるもの」以外に、人生には絶対に確かな本当に「輝かしい」ものがあり得るか否かをカーテンの陰にそっと隠して論を立てた。その上でわが国のエッセイ史上に屈指の、人を励まし勇気づける忠告が生まれ得たのである(10)。

谷沢氏の分析に少し補足する。伊藤整はなぜ「真の」青春の具体的内容を明らかにしないのか。谷沢氏は、「そんな結構なモノは絶対に見当たらぬのだ」と書いているが、仮に伊藤整に「真の」青春と考えるものがあつたとしても、それは読者の手前示すことができなないのである。なぜなら、もしそれがまさに「真の」青春と呼ばれるに値するような素晴らしいものであれば、それだけに大多数の読者にとってはやはり容易に手に入れることのできないものであろうから、彼らには「偽の」青春も「真の」青春も所有できないという身も蓋もない話になる。逆にそれが誰にでも所有できる平凡なものであれば、それは青春という美しい名に値しない、所有していても所有の喜びのないものとなってしまう。つまり、伊藤整は自ら立てた論理のジレンマに陥り、「真の」青春が何であるかを示せなくなってしまうのである。

しかし、伊藤整はここでさらに大掛かりな手品を繰り広げる。谷沢氏は、「同じくツマラヌモノであるなら、『健康な肉体の力、美貌』その他その他を、誰にどういわれようとしつかり『所有』するほう

が増しである」と言うが、伊藤整はそのツマラヌモノを所有しなかつたことよつてかえつて青春を知ることができたという理屈を組み立てるのである。「しかし、だからと言つて、私が青春を知らなかつたことにはならない。むしろ私はそれを所有しなかつただけ、それだけ、強烈に青春を知つていたような気がする。私は、青春というものを、青春らしい生活型式や交友や恋愛やスポーツそのものとしては所有しなかつた。しかしそれらを所有しないことで、正確に言えば、所有しないと思つた時、青春は私にあつた。」すなわち、もし自分が「青春らしい生活の形」を所有していたならば、自分はその満喫しそれに耽溺するのみで青春の意味について深く考えることもなかつたであろう。しかし自分はそれを所有せずそのことについて悩み苦しんだがゆえにかえつて「強烈に青春を」知ることができたのだ。そしてその「青春らしい生活の形」は実はツマラヌモノであつたのだ。自分はツマラヌモノを持たなかつたことよつて、逆に青春の存在を実感できたのだ、という訳である。この論理は、先に出てきた、現実には何も所有していないがゆえに可能性としてすべてを所有しているという論理と極めて似たものであることがわかるだろう。現実の所有の犠牲の上に、観念としての所有が勝利を謳うのである。

が、こんな論理が現実の青年に対しては何ら忠告にならない、単なる子供騙しの詭弁にすぎないことは容易に見てとれる。伊藤整が「強烈に青春を」知ることができたのは、「青春らしい生活の形」を自分が所有しないことで悩み、傷つき、そしてそれを手にいれようとしてあがいたからである。つまり彼が青春の最中にあつたときには「青春らしい生活の形」は決してツマラヌモノなどではなく、ま

さに青春そのものとして存在していたのだ。もしそれをツマラヌモノであると認識していたのであれば、それを所有していないことに苦しむこともなく、したがつて「強烈に青春を」知ることなどできなかつたであろう。要するに、現在青春の中にいる者にとつては、「強烈に青春を」知るためには、やはり「青春らしい生活の形」を青春そのものとして求め続けなければならないという矛盾した結論になつてしまふのである。

この矛盾からわれわれは次のことを理解することができよう。この「青春について」という文章は一見「青年に与ふる書」のような体裁をとりながら（それだからこそ多くの高校教科書に採用されているのであるが）、実は伊藤整が狙いをつけた読者は青年ではなく、彼と同じように「青春らしい生活の形」を何も所有できないままに青春を過ぎていった者達なのである。ある論者が選択した論理によつて、彼が想定する読者層が特定できる。この論理は今青春の中にある者に対しては機能せず、すでに青春を過ぎ去つた者にしか働かない。この文章は彼らに対する「慰めの書」なのだ。「確かに君達は私と同じように、『青春らしい生活の形』を何も所有しないまま青春を終えてしまった。しかし、それを所有しないことに悩み、傷つき、苦しむことよつてより『強烈に青春を』知ることができたではないか。しかも君達が求めようとして果たせなかつた『青春らしい生活の形』は実はツマラヌモノであり偽物だつたのだ。ツマラヌモノを犠牲にして本当に青春を実感できたのだ。それでいいではないか。」と。

だが、伊藤整は彼らを慰めるだけでは終わらせはしない。現実には青春の敗北者であつた彼らを勝利者に仕立てあげようとするので

ある。「青春らしい生活の形」を偽物であると断定した後、彼は次のように言う。「それらの醜さとむなしさに耐える時に、本当の青春の力が必要になる。それらのものに耐える力は、老年にはまったく存在せず、中年にもほとんど存在しない。青春のみがそれに耐えることができる。」しかし、本当に力が必要なのは、単に耐えることではない。目標を持たずに耐える、ということである。いつ、どのようにして、自分に、あることが満たされ、あることが成就し、このむなしさから抜け出すことができるか、ということが、あらゆる青年のひそかな、そして心からの願いであり、期待である。しかしだれも、何人も、その青年に、それを確約してやることができな。洪水の後に新しい発芽と成長と実りがあるかどうかは、本人にはわからず、まして他人にはわからない。しかも彼は全力でもって、何かをなそうとし、崩壊に耐え、無限にやり直して、待つていなければならぬ。そして、そのようなものが、いつ終わりになるかわからない。それが青春である。」つまり、現実には「青春らしい生活の形」に相手にされなかつたにすぎない者達が、ここでは「それらの醜さとむなしさに耐え」た勝利者と見なされるのである。「目標を持たずに耐える」という苦しい経験を乗り切った者は、「本当の青春の力」を持つていたのだとして、青春の所有が過去に遡って認定されるのだ。念の為に再度確認しておく、右の引用はいかにも今青春の中にある者に対する励ましの言葉のように見えるが、実際には既に青春を過ぎ去った者に対して書かれているのである。もし現在の青年が「青春らしい生活の形」が偽物であると納得してしまつたのなら、彼はそれを所有していいことに苦しむこともなく、他人がそれを所有していることを羨望することもない。したがって、

「それらの醜さとむなしさに耐える」までもなく、「本当の青春の力」も必要ないことになる。この文章の読者は飽くまでも、「青春らしい生活の形」にあこがれ、それにふりまわされ、そして傷ついていた過去の青年達なのである。

しかしながら、この文章の最後で、伊藤整は明らかに現在の青年を相手にした言葉を喋っている。彼らはかつての伊藤整がそうであつたように、青春の中で苦しみ、闘っている青年たちである。彼らにツマラヌモノの話を聞かせても無意味だろう。伊藤整はただ友人を持つことを勧めるのみである。

ただ、もし、その人に、同じように耐える友人がいれば、彼の耐える努力は、半分で足りるだろう。実は努力が半分で足りるのではないが、期待の念が倍になることによつて、努力のむなしさの意識が半減するであろう。そのような同行者を持つことは、青春の時のみ可能であつて、それ以後には、人間にはやって来ないことである。同行者があれば、人は不可能であるはずの長い道を行くことができる。

友人を持つことの勧めなど、平凡すぎることに感じられようが、実はこれこそがわれわれの誰もが可能な青春の所有なのではないだろうか。伊藤整がここで語っているのは、実際に友人を持つていかどうかという現実の所有についてはない。「そのような同行者を持つことは、青春の時のみ可能であつて、それ以後には、人間にはやって来ない」という、青春の時だけが持つ特権としての所有についてなのである。

最後に、「読者」についても少し補足しておきたい。この「青春について」が対象とする読者は、かつて「青春らしい生活の形」を所有できず、今痛恨の念でもって青春を振り返っている人々であるが、実はそれはわれわれ全員なのだ。なぜなら伊藤整が立てた論理の上に乗って進む限り、われわれは必然的に青春の敗北者の役割を振当てられるからである。これは数学の問題である。伊藤整は、青春を何よりも所有という観念によってとらえた。青春の始まりにある者は、何も持っていないがゆえに、また何にも手を付けてないがゆえに、可能性としてすべてを所有している。可能性としていえば、それは無限に近い。しかし、青春の中で彼らが手にいれるものは、たとえ素晴らしいものであつたとしても、それは有限のものである。つまり現実にも所有したものは、可能性としての所有に較べて必然的に矮小で貧弱なものにならざるを得ないのだ。このように、伊藤整の所有の論理は、この文章の読み手を、強引に自分の想定した読者に変貌させてしまう力を持っているのである。

3 まとめ

この教材は実際の授業でどのように教えられているのであろうか。これを読んだ高校生が次のような感想を書いてきたという。

ぼくは、このようなものを読むのは大きらいである。なぜなら、それら（「青春」）を題材にしている論説文は、ほとんど「青春」をむずかしく定義づけようとし、最後には青春とはつらい、苦しみのをのりこえるべき時であり、目先の楽しさを青春と思つて

はならない。青春とはもつと有意義なものである、で結ばれているからである。この「青春について」にも、二十一ページの六行目からそのようなことが書いてあるが、伊藤さんがわけ知り顔で書いているところが目にかぶようだ⁽¹⁾。

当然の反応というべきだろう。「青春について」は、高校生のよきな、青春の始まりにある者の青春論ではなく、青春を過ぎ去った者の青春論であるからだ。この高校生が伊藤整の言葉の意味を理解するためには、まだ暫くの時を必要とする。が、それを望むわけではないが、彼もまた楽しいはずであつた青春の、あまりの味気無さとむなしさに愕然とする日が来るだろう。所有の論理によって、われわれは必然的に矮小で貧弱な青春しか持てないのである。その時になつて初めて彼は、伊藤整の思いやりに満ちた言葉に気づくだろう。

この教材が高校の教科書にふさわしいものであるかどうかはわからない。内容は明らかに高校生を対象としたものではないが、文章の気品、鋭さ、正確さは国語教室で味読するに足る資格を持っている。あるいは、先の高校生とは違って、本当にこの文章に感動し、説得される生徒もでてくるかもしれない。が、ひとつだけ確実に言えることは、たとえこの文章に動かされたとしても、青春の現実の中で、彼もまた「青春らしい生活の形」を求めて必死にあがき続けるだろうということだ。それらをツマラヌモノとして片付ける小賢さは青年のものではない。本当の青春は彼らの側にあるのである。

[注]

Sermonic: Richard M. Weaver on the Nature of Rhetoric, Baton

(1) これはもちろん、米国で rhetorical analyses と呼ばれている

Rouge/Louisiana U. P., 1970, p. 224

もの概念規定とは異なる。参考までに、米国の代表的な修辞学者であるコーベットの、rhetorical analyses の定義をあげてみる。「もし、レトリックを、様々な可能な手段の中から賢明な選択をするための技術であるとするならば、そこには、最良の選択を導くための何らかの基準か、あるいは考慮すべき諸点があるはずである。修辞学的分析においては、題材、ジャンル、場、目的、著者、読者などがそれにあたる。だから、ある批評家が、なぜ著者がこのような書き方をしたのかということ、上の諸点に関連づけて答えようとするとき、彼は修辞学的分析をしてゐるのだといえる。(意訳)」Edward P. J. Corbett, "Introduction to Rhetorical Analyses of Literary Works, 1969", Robert J. Connors ed., *Selected Essays of Edward P. J. Corbett*, Dallas/Southern Methodist U. P., 1989, p. 93f. これは、一九六九年に出版されたコーベット編集の *Rhetorical Analyses of Literary Works*, New York/Oxford U. P. の再録である。コーベットの定義は言語表現上は私のものどだい異なるが、具体的な分析作業においては共通する部分が多い。

(2) 『福田恆存全集』、第五卷、文藝春秋、昭和六一年、一五四ページ。

(3) 「譬え」による議論については、以下の拙稿を参照していただきたい。香西秀信「『譬え』による議論の修辞学的分析」『日本語と日本文学』、13 (平成二年 十月)、一〜九ページ。

(4) Richard M. Weaver, *Richard L. Johannesen ed., Language Is*

(5) 向井敏「文章読本」、文藝春秋、一九八八年、二四九ページ。

(6) 森田信義編『説明的文章の実践研究文献目録 第二集』、溪水社、平成三年、二四五〜六ページ。

(7) 石垣義昭「伊藤整『青春について』」、増淵恒吉他編『国語教材研究講座 高等学校現代文』下巻、有精堂、昭和五八年、一一九ページ。

(8) Charles L. Stevenson, "Persuasive Definition", *Mind*, 47 (July 1938), p. 322

(9) Stevenson, *Ethics and Language*, Yale U. P., (1944) 1948, p. 211

(10) 谷沢永一『現代評論』(『鑑賞 現代日本文学』第三四巻)、角川書店、昭和五八年、一一九〜二〇ページ。

(11) 倉沢栄吉・中西昇編『国語の教材研究 三』国土社、に紹介されているもの。引用は石垣氏の前掲論文(一一三ページ)によった。